

阿部真弓氏の博士論文「複製技術時代の芸術家による美術史——1910-20年代の西洋絵画における古典古代と現代」は、1910年代半ばから1920年代前半のフランスおよびイタリアを中心とするヨーロッパの美術、とりわけ絵画作品における「古典回帰」の現象について、その作者たちの美術史的言説に注目し、複製図版の果たした役割にも目を配った、テキストおよび作品の丹念な分析を通じて、未来を志向する前衛のうちからこそ遠い過去である古代や古典的秩序への回帰が生じるという、逆説的動向の多様な表われを仔細に追跡した論考である。そこで取り上げられるおもな画家は、アンドレ・ドラック、ウンベルト・ボッチョーニ、ジーン・セヴェリーニ、カルロ・カルラ、パブロ・ピカソ、ジョルジョ・デ・キリコ、アメデ・オザンファン、シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ（ル・コルビュジエ）の八名だが、同時代の詩人ギヨーム・アポリネールやジャン・コクトーによる美術批評や関連作品のほか、高村光太郎や岸田劉生らによる日本での受容なども視野に収められている。

本論文は序と結論に挟まれた七章構成を取る。序では、「前衛的古典主義」などと総称される古典回帰を、個々の画家たちが選び取った「古典」の様態やそれを支える彼らの美術史的展望からより詳細に検証するという本論文の目的が提示される。本論文はこの目的ゆえに、芸術家たちが前衛的態度から古典主義的志向へと移行する過渡期にこそ着目することになる。

第1章「樹木の様式——アンドレ・ドラックの古典回帰とアルカイズム」では、ドラックが手帖に書き残した絵画論やモーリス・ド・ヴラマンクとの書簡といった一次資料の分析を通して、ルネサンス以前のプリミティブな美術をはじめとする、地域と時代を越えた多種多様な「アルカイズム」へと向かうこの画家の志向性が解き明かされる。阿部氏によれば、この時期のドラックは「タブロー毎に彼自身にとっても見慣れない特異な時間帯をつくりだし」、その時間帯のなかでいち早く移動していった。それはまさしく本論文が考究しようとする、未来と過去が錯綜する時間帯だった。

第2章「タイムラグ——初期未来派絵画の時空」と第3章「極端な前衛と古典回帰という回復期——未来派以後の美術史」が取り上げるのはイタリア未来派の芸術家たちである。前者ではこの前衛運動固有の時間性をとらえるため、未来派独自の運動表現がデ・キリコの形而上絵画との対比や写真との関係のなかで論じられるのに対して、後者では、著書『未来派絵画彫刻』などにおけるボッチョーニの印象派批判と実作でのセザンヌ回帰、『キュビズムから古典主義へ』を著わしたセヴェリーニの内的葛藤を孕んだ「理性による古典主義」への移行、さらには、「ジョットの的中世」としての現代絵画という、カルラのアナクロニクな美術史観が、未刊行資料を含むテキストの読解によって浮き彫りにされる。

第4章「幕間——古典古代と未来の共鳴」は、1917年5月にパリで初演されたバレエ・リュスの舞台「パレード」をめぐる、脚本のコクトーと舞台美術および衣裳のピカソらが共同で制作したこの作品における古代性と現代性、秩序と無秩序の両面性を、アポリネールやマルセル・ブルーストといった同時代人の受容を踏まえて描き出す。それは本論文自体の「幕間」として、コクトーの言う「秩序の喚起」を主軸とした後半部の議論への接続をなす。

第5章「冒険と秩序の間」で阿部氏は、画家モーリス・ドニによる絵画論中の「古典的秩序」という表現に注目することから始め、オザンファンとジャンヌレの雑誌『レスプリ・ヌーヴォー』誌面レイアウトの秩序感覚のほか、コクトーの著書『秩序の喚起』に登場する「無秩序としての秩序」という矛盾した観念が、ダダイストの文書にも見出されるという同時代性を論じている。そこではさらに、写真を用いたフランシス・ピカビアのダダ的コラージュが「アングル時代」と称されるピカソの絵画の写実性と通底するといった、複製技術と古典主義とが交錯する、あらたなリアリズムの論理がたどられる。

第6章「神殿の輪郭——形而上絵画における古典古代」で阿部氏はまず、デ・キリコが「建築形而上学」と呼ぶ建造物のモチーフを取り上げ、そこに描かれた石柱の縦溝および女神像の図像的着想源がパルテノン神殿とアテナ・パルテノス像であったことを明らかにしている。阿部氏はさらに、1920年代に大きく様相を変えて、細部を捨象しない描写を行なうようになるデ・キリコの絵画の方向性が、同時期の彼の美術史的著作におけるプッサンおよびベックリーン賛美と連動していた点を指摘し、1919年の論考「技法への回帰」でデ・キリコが宣言した「回帰」とは、アングルやラファエロ、あるいはルノワールやクールベを模範とする、複数の異なる古典性への重層的な逆行運動であったことを跡付けている。

阿部氏によれば、デ・キリコの建築形而上学における古典古代建築の参照はオザンファンおよびジャンヌレのピュリスム絵画にも共通している。第7章「ル・コルビュジエの「直角」の芸術史」は、この二人の共著『近代絵画』における反模倣芸術のテーゼや印象派批判、アングル、セザンヌ、スーラの賛美といった近代絵画史観が、二項対立的な関係にある図版の配置を通じて視覚化されていたことを例証し、ル・コルビュジエの『建築をめざして』なども踏まえ、ページ上の秩序だった図版の配置自体が、「直角」という語が象徴する古典的な秩序理念の体現であったと論じている。

結論で阿部氏は、「古典回帰」の現象は単一の古典主義的規範に沿うものではなく、一人ひとりの芸術家たちが、それぞれ独自の美術史的回顧のもとに「古典」として選んだ歴史的対象の複数性こそを基礎として、その多様な「古典」への志向性が相互に影響・増幅し合った結果の産物であったと主張する。そのプロセスの分析からは、アングルの絵画の再評価といった共通する特徴も浮かび上がった。本論文は、複製技術を活用して表現された芸術家たちの美術史が、彼らの創造活動と不可分なかたちで実践された、現代における絵画の古典性の構築にほかならなかったことを指摘して締め括られる。

審査会では、数多くの芸術家たちの作品のみならず、美術史的言説をも対象にして、一次資料を丁寧に分析しながら比較対照を行ない、画一的に論じられがちであったこの時代の古典主義的潮流の多様性を浮かび上がらせている点が、全委員からきわめて高く評価された。とくに第1章のドラム論などにおける、作品や言説の細部を繊細な筆致でとらえた論述が、創見に満ちていることも委員の多くが認める場所であった。他方、主要な分析対象である八名の画家たちを選ぶ根拠が具体的に説明されていない、「古典」「古典古代」「アルカイスム」といった鍵概念が明確に区別されて定義されていない、論述が細部に入り込むあまりに明晰さをやや欠くため、より直截な表現が望ましい、結論が古典回帰の多様性に収斂してしまい、この複線的現象内の相互関係の解明が不十分であるといった指摘のほか、本論文が対象とする時代の世界史的事件である第一次世界大戦との関係や、形而上絵画一派の雑誌『ヴァローリ・プラスティチ』の言説および誌面の分析がよりいっそう深められるべきであるといった今後の課題も提起された。しかし、これらの指摘は、本論文が広範な対象を独創的な視点から論じているがゆえに導かれたものであり、本論文の学術的価値を損なう瑕疵ではないことが確認された。

以上により、本審査委員会は全委員一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。